

山口俊章著

『フランス一九三〇年代 状況と文学』

渡 邊 和 行

一

本書は一九三〇年代のフランスの文学者が、状況といかに関わったのかを明らかにしたものである。著者は既に『フランス一九二〇年代 状況と文学』（中公新書、一九七八年、以下前著と呼ぶことにする）を公にしており、本書はその後編にあたるものである。これで著者の宿志も完結をみたわけであり、まづお祝いを申しあげたい。われわれはこの二冊によって、『危機の

二十年』におけるフランス作家の知的営為を知ることができる。しかも「状況と文学」という副題が示すように、本書は単なる文学史ではなく、状況の真只中で文学者がいかに生きたのかを問うことをテーマとしている。この意味で本書は、多様な文芸思潮を状況のなかに位置づけた広義の社会史に属するものである。従って本書はフランスの「状況と文学」を研究する際の、出発点になる文献と言いうる。なぜならR・ロラン論やマルロー論といった作家論は汗牛充棟の感があるが、全体を俯瞰して文芸思潮をフォローしたものは皆無に近いからである。ロペー

ル・ブラジャックやジュール・ロマンに至っては、わが国では本書が初めて光をあてたのではなからうか。それでは「時代と人間の本质に迫る」(あとがき)のことを壮図とした本書に対し、まづ総論的な問題を提示し、ついで各論的にいくつ指摘すること書評としたい。なお歴史畑出身の評者の限界ゆえに、「文学」より「状況」に焦点をあてた書評となることをお断りしておきたい。

## 二

本書は前著で予告されたとおりの構成をとっている。

第一章 ファシズムの思想と文学

第二章 人民戦線と文学者

第三章 ヒューマニズムと状況

第四章 信仰と状況と文学

第五章 実存と文学

エピローグ 戦後の文学者裁判

今少しく各章の輪郭を記せば、第一章では三六年までの右翼文学者、シャルル・モーラスとドリユ・ラ・ロシエルとロベール・ブラジャックがとりあげられる。状況としては二月六日事件が柱になっている。第二章では文学者の反ファシズム運動の

一つとして文化擁護国際作家会議が紹介され、ついでレオン・ブルムとシモーヌ・ヴェーユ、それにフランス人民党に参加したドリユに言及される。時期的には三四年から三六年までが対象となっており、人民戦線政府の誕生とスペイン戦争が軸である。第三章はアンドレ・ジッドの『ソヴィエト紀行』とアンドレ・マルローの『希望』、「七月九日運動」のリーダーで仏独協調論者たるジュール・ロマンを扱っている。第四章ではカトリック作家であるフランソワ・モーリヤックとジュールジュ・ベルナノス、それに『セット』というドミニコ会系の新聞がとりあげられる。二〇世紀初頭から三七年までの時期が対象であるが、ここでもスペイン戦争への反応がひとつの軸となっている。第五章は三八年から大戦突入までのルイ・アラゴンとポール・ニザンという二人のコミュニスト作家、そして三〇年代のサルトルとカミュ、それに占領下に対独協力者となったドリユとブラジャックを検討している。エピローグはドリユとブラジャックの最期をとりあげている。

前著と比較して本書は二つの特徴をもっている。一つは前著がリベラル左派や左翼の文学者に多くの紙幅を費しているのに対し、本書は左右両翼の文学者に言及し、バランスのとれた構成になっていることである。それは本書がカトリック作家や右翼文学者に一章をあてていることに示されている。このことは

本書に前著にはない広がりを与えている。

他の一つは前著が「状況」より「文学」にウェイトを置いた構成になっているのに対し、本書は前著より「状況」に多くのページをさいていることである。このことは三〇年代が二〇年代より社会が激動し、状況が政治化して文学者のアンガージュマン（政治参加）が増大したことの反映にほかならない。それはジッドが三一年七月の日記に状況が「恐ろしいほどに私の心を文学からそらせる」（前著、一七六頁）と記した事情とも符合する。従って状況が活性化した一九三〇年代には、文学者と状況のダイアログの所産として作家の行動や作品を理解する著者の方法は、肯綮に迫るアプローチと言いうる。

以上のことを確認したうえで総論的に四点、指摘したい。第一に状況と文学者のダイアログについてである。三〇年代の国内状況として二月六日の騒擾事件、人民戦線の誕生と崩壊、対外状況としてヒトラー政権の出現、スペイン内戦、ミュンヘン協定、第二次大戦の勃発などを挙げることができる。著者の立場はこれらの状況のなかに身を置く同時代人の一人として、作家の行動を理解し説明せんとするものである。著者自身「検証されるべき問題は、つねに歴史過程、すなわち作家が生きた時代の現在性において彼の肉声を解説することである」（三一頁）と述べている。これは状況との生ける接触を重視する立場

と言ひ換えてよいであろう。かかる立場から本書は時系列的に叙述しつつ、作家をとりあげるといふ構成をとっている。これはベターな方法であるが、「状況」により関心を寄せる評者としては、一つの事件に対する両翼の文学者の態度をもつと紹介していたできたかった。この意味で評者は三〇年代の状況と文学者のダイアログが、本書ではやや不足しているという印象を禁じえない。ドリユやブラジャック以外の作家についても三〇年代に互って、「作家の肉声」を掬いあげ位置づけるなら、本書は一層の深みを増したと評者は考えるからである。

確かに本書は三〇年代フランスの客観状況に触れるところが多く、しかもその判断は概して首肯しうるものである。しかし巨擘とか木鐸と称される知識人の場合、客観的状況より主観的状況の方が重要性をもつことも少なくないと言いうる。つまり状況と文学者とのダイアログとは、外的な政治過程（≡状況）と作家の内的な心理過程との対話にほかならない。敷衍すれば文学者も思想家同様に、自己の価値に照らして状況を評価し、状況にコミットしたり、その心情を小説という形で吐露すると考えられるのである。従って「作家の肉声」は、政治過程と心理過程を有機的に結びつけるものとして位置づけられる。そこで重要となるのは、文学者が自己が遭遇した状況をどう評価したのかを知ることである。状況に対する文学者のコメントをよ

り多く掬いあげることが望むのはこのためである。これが困難な作業であることは評者もよく承知しているが、著者には是非それを望みたい。具体的には右翼文学者から見た人民戦線像、両翼の文学者のヒトラー政権へのコメントやミュンヘン協定への反応についての情報を増やしていただきたい。なぜならこれらの事件は、文学者の対ドイツ認識や戦争と平和の問題への態度を示唆すると考えられるからである。著者も述べるように「言及すべくして割愛した対象も少なくない」(あとがき)ことは、惜しまれるのである。

第二にジャン・トゥシャールの言う「三〇年代の精神」についてである。トゥシャール論文の要約は西川長夫教授に譲るが、本書はこの問題に触れるところがない。西川教授が指摘するように「デカダンス」と「革命幻想」を特徴とする青年知識人の心理状態のなかに、われわれは三〇年代の精神状況の典型を看取することができるのである。たとえ青年知識人の主張が諸説混合に終わったとしても、かれらの運動は言わば一斑を見て全豹をトしうるものであっただけに、この問題を避けて通ることとはできないと評者は考えている。

第三に「文学的ファシズム」についてである。これはディーター・ヴォルフの指摘であるが、われわれもフランスの「ファシズム精神」が文学作品によって表現されたことを看過しえ

ない。<sup>(2)</sup>従って「ファシズムと文学」という問いかけが必然的に生じてくるのである。この設問は当然、「三〇年代の精神」とも関連してくるはずである。ドリュヤやブラジャックを手掛りとして著者が語る「ファシスト・ロマン主義」も、青年の老人に対する反抗という傾向をもつ「三〇年代の精神」と関連させてこそ、その特色を際立たせうるのではなからうか。著者が右翼リーグの国民戦線を「反ファシズム勢力によって、実体以上のファシヨ勢力としてクローズ・アップ」(二二頁)された擬似ファシズムと位置づけ、さらに著者がフランスにおけるファシズムの思想は主に「文学的ファシズム」として開花したというヴォルフの立場をとると思われるので、「ファシズムと文学」の問題を深める必要があるはしまいかと評者は考えるのである。評者は著者に少くともドリュユとブラジャックについては、第一章の密度を保って三〇年代の両者の行動を跡づけていただきたいだったのである。

第四にアムステルダム・プレイエル運動など反戦反ファシズムの運動を組織したのは、コミンテルン西欧局の宣伝部長たるミュンツェンベルクであった事実を鑑み、共産党系の文学者の演じた役割についての分析を望みたい。

三

以下各章ごとに何点か指摘したい。

第一章 三〇年代後半の動向をも勘合すれば、モースの反ドイツ主義が稀釈されるプロセスこそ重要であると評者は考えている。従って三四年以降のモースもカヴァーしていただきたかった。評者も以前誤りを犯したが、ラ・ロックは大佐ではなく中佐である(二〇頁)。旧出征軍人(二〇頁)と在郷軍人(三〇頁)と旧軍人(五二頁)は、同じ社会集団を指していると思われるので用語の統一が望まれる。

第二章 二月六日事件から人民戦線政府の成立までのクロノロジ―は、今日の人民戦線研究の成果に通曉したものであり、評者が付加すべきことはない。文化擁護国際作家会議は、著者が初めて本格的に紹介したのではなからうか。註(45)の大臣の党別構成はボンフーに依拠したと思われるが、正しくは社会党一二、急進社会党八、社会共和連合一である。民主左派とは上院の院内会派の名称である。さて不干渉政策のクロノロジ―については、事実関係に二〇三の誤りが見うけられる。詳細は拙稿を参照していただきたいが、<sup>(3)</sup>ここでは社会党内の介入反対派の存在や、援助派も決して一つにまとまっていなかったこと、

シモーヌ・ヴェーユを義勇兵の精神的代表とすることには問題があることなどを指摘しておきたい。またスペイン戦争の節ではブラジャックを是非ともとりあげていただきたかった。誤植と思われるが、ドイツの兵役延長は三年ではなく二年である(二〇頁)。

ジッドとロランらを扱う第三章は、おそらく著者が最も得意とする章であり教えられることも多い。一五七頁のアルカザールは、スペイン語の発音ではアルカサルである。

第四章 今世紀のフランスのカトリックについては、わが国のフランス史研究のなかでも手薄なところであるだけに本章は貴重である。

第五章 ミュンヘン会談から開戦そして占領に至る時期は、フランス史のみならずヨーロッパ史においても重要な時期である。従って右から左までの文学者が状況のドラスティックな展開に対して、いかなる態度をとったのかを幅広く紹介していただきたかった。

各論の最後として細かいことではあるが、引用文中のさらなる引用ないし会話文は「……」「……」「……」よりも「……」の方が読みやすいことを付言しておく。

## 四

以上何点かに渡って批評を加えたが、本書が「状況と文学」すなわち「政治と文学」という古くて新しい問題にアプローチした労作であることは言うをまたない。今後、本書を出発点としてこの分野での研究の深化が望まれる。この作業によってわれわれは人民戦線を生み出した心理状況や「宥和現象」（平瀬徹也）を生み出した精神状況の底流に触れうるからである。

- (1) 西川長夫「『三〇年代精神』と文学」河野健二編『ヨーロッパ——一九三〇年代』（岩波書店、一九八〇年）二四—三四頁。
- (2) デイター・ヴォルフ『フランスファシズムの生成』平瀬徹也・吉田八重子訳（風媒社、一九七二年）一四—一五頁。
- (3) 拙稿「不干渉政策の決定過程——ブルム内閣とスペイン内戦——」『香川法学』第三巻一号、二号（一九八三年）。

（本書は日本エディタースクール出版部より出版）